



セルバンテス

Miguel de Cervantes Saavedra (1547–1616)

スペインの小説家。アルカラ・デ・エナーレスの貧しい外科医の家に生まれ、正規の教育は受けなかった。1568年イタリアに渡って枢機卿の侍僕となり、70年にはイタリア駐屯軍の兵卒となり、71年、史上有名なレパントの海戦に参加して負傷し、生涯左手の自由を失った。75年帰国の途次海賊におそわれ、アルジェリアに奴隷として5年間苦難の生活を送り、84年に17歳も若いカタリーナ・デ・パラシオスと結婚し、翌年、牧人小説《ラ・ガラテア》を発表。87年文学をすててセビーリャで小麦買入係となり、92年と97年には金銭上の過失で投獄され、窮乏生活を送ったが、1605年《ドン・キホーテ》の前編を出版し、たちまち世人のかっさいを博した。その後《ドン・キホーテ》の後編を出すまで、戯曲集、短編集などを出版したが、生涯セルバンテスの生活は苦難にみちたものだった。

(「世界名著大事典」より)

『機知あふれる騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』

~*El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*~

『前編』52章 1605年刊

『後編』74章 1615年刊

全 126章からなる長編で、登場人物は延べ 698人

(ちなみにトルストイの『戦争と平和』は 559人)

主たる舞台は 16~17 世紀にかけてのスペインの街道と旅籠で、取り扱われるエピソードもほとんどすべて、当時のスペインの風俗と関わっている。

・・・あらすじ・・・

ラ・マンチャの片田舎に住む 50 歳になろうとする紳士が、騎士道物語を読みすぎて狂気にとらわれる。彼の狂気は、荒唐無稽な物語に書かれていることを歴史的事実と混同したこと、17 世紀の初頭に中世の騎士道を実践しようとしたこと、そして、自分も遍歴の騎士になれると思い込んだこと、以上の 3 点からなっている。そして彼は、おのれの名誉を高め神に奉仕するために古ぼけた甲冑に身を固めて自ら騎士ドン・キホーテと名乗り、田舎娘を思い姫ドゥシネアに仕立て上げ、近所に住む百姓のサンチヨ・パンサを従士にし（これは第 7 章からであるが）、やせ馬ロシナンテにまたがって旅に出る。
(「世界文学大事典」より)



ピカソ画

ドン・キホーテ 名場面集

～前篇第8章～「風車の冒険」

そのとき二人は、野原の行く手に立ち並んだ三十から四十の風車に気づいた。ドン・キホーテはそれを目にするやいなや、従士にむかって、こう言った――



馬もその乗り手もそっくり翼にさらわれて……

ギュスターヴ・ドレ画



「友のサンチョよ、どうやら運命の女神は、われわれがのぞんでみたよりもはるかに順調に事を運んでくださるとみえるぞ。ほら、あそこを見るがよい。三十かそこらの途方もなく醜怪な巨人どもが姿を現したではないか。拙者はこれから奴らと一戦をまじえ、奴らを皆殺しにし、奴らから奪う戦利品でもって、お前ともども裕福になろうと思うのだ。というのも、これは正義の戦いであり、かくも邪悪な族を地上からおいはらうのは神に対する立派な奉仕でもあるからだ。」

「どこに巨人がいるだね？」と、サンチョ・パンサが訊いた。

「ほら、あそこに見える長い腕をした奴らじゃ」と、主人が答えた。

・・・「しっかりしてくだせえよ、旦那様」と、サンチョが言った。「あそこに見えるのは巨人なんかじゃねえだ。ただの風車で、腕と見えるのはその翼。ほら、風にまわされて石臼を動かす、あの風車ですよ。」

(「ドン・キホーテ前篇 (一)」

牛島信明訳より 第8章抜粋)

～後篇第 19, 20, 21 章～

「カマーチョの婚礼－キテリアとバシリオの恋物語」

美女キテリアと許婚バシリオの間に金持ちのカマーチョが入って美女を奪います。婚礼の日、バシリオは剣で胸を突くという狂言を演じて美女の愛を取り戻しました。

(「ドン・キホーテ・デ・千秋」より)



ミンクスのバレエ
「ドン・キホーテ」



～盛大な婚礼の舞台～

折りしも日が暮れかかっていた。しかし一行が村に着く前から、彼らの目には村のあたりの空一面に、きらきらと輝く数限りない星がちりばめられているように見えた。しかもそこに、笛、小太鼓、手持ち豎琴(サルテリオ)、リコーダー、タンバリン、ティンブレルといったさまざまな楽器の渾然一体となった心地よい楽の音が聞こえていた。・・・音楽に打ち興じていたのは婚礼を祝福する者たちで、いくつかのグループに別れた彼らは、あるいは踊り、あるいは歌い、はたまた上で述べたような楽器をかなでながら、その快適な場所を動き回っていた。

(「ドン・キホーテ後篇(一)」 牛島信明訳より 第19章抜粋)

～後篇 第26章～

「ペドロ親方の人形芝居」

ドン・キホーテはある宿屋で旅芸人ペドロ親方の人形劇を観る機会に恵まれた。出し物は「メリセンドラの救出」というもの——モーロ人の城に囚われの身になっていた貴婦人メリセンドラを、彼女の夫ドン・ガイフェーロスが助け出して馬で逃げると、そのあとをモーロの大群が追いかける。ところが、これを観て激昂したドン・キホーテは、異教徒から弱きを助けるは騎士の義務とばかり、人形に向かって刀を振りまわし、舞台と人形をめちゃめちゃに壊してしまう。

(「ドン・キホーテの旅」より)



ファリャのオペラ

「ペドロ親方の人形芝居」第2幕のスケッチ



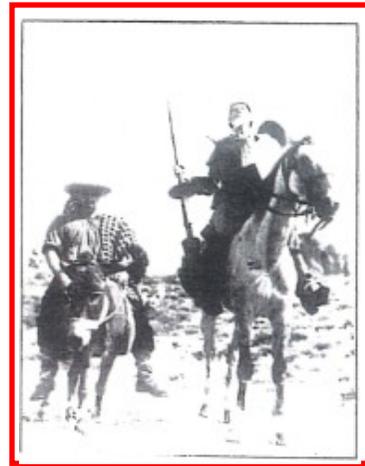
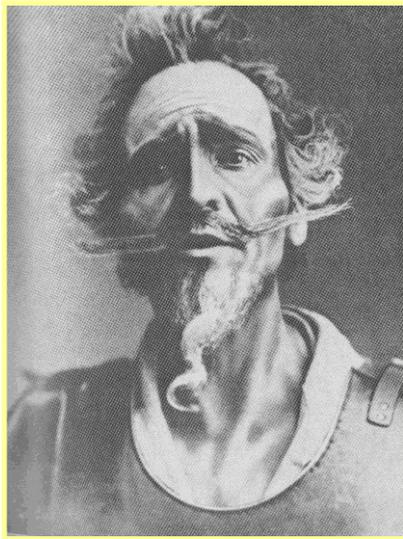
「やあやあ、拙者がこの世にある限り、拙者の目の前で、ドン・ガイフェーロスのごとき音に聞こえた騎士、豪胆きわまる恋慕の騎士に狼藉が加えられるのを見過ごすわけにはまいらんぞ。さあ、止まるのだ、ここな素性のいやしきごろつきども！あとを追ってはならぬ、追跡いたすでない！拙者の言うことが聞けぬとあらば、ここで拙者と一線を交えるほかないのじゃ。」

(「ドン・キホーテ後篇(二)」 牛島信明訳より 第26章抜粋)

～後篇第 74 章～ 「ドン・キホーテの最期」

<銀月の騎士>に決定的な敗北を喫したドン・キホーテは故郷に帰り、病の床で狂気から覚めて善人アロンソ・キハーノに戻る。そして遺言を終え、ついに最期を迎えるのであるが、それを知ったサンチョの腫れた臉からは、涙がどっと堰を切ったようにあふれ出す。

(「ドン・キホーテの旅」より)



ドン・キホーテに扮した
シャリアピン

「友のサンチョよ、どうか赦しておくれ。この世に遍歴の騎士がかつて存在し、今も存在するという、わしのおちいっていた考えにお前をおとしいれ、わしだけでなく、お前にまで狂人と思われるような振舞いをさせて本当にすまなかった。」

「ああ、旦那様！」と、サンチョが泣きながら叫んだ、「どうか死なねえでくださいよ。それより、おいらの言うことを聞いて長生きしておくんなさい。いいかね、おいらの大事な旦那様、この世で人間のしでかす一番でかい狂気沙汰は、別にたいした理由もなければ誰に殺されるってわけでもねえのに、ただ悲しいとか侘びしいとかいって死に急ぐことですよ。さあ、お前様、そんなにぐったりしてねえでベッドから起きあがり、前に話し合ったとおり、羊飼いの格好をして野原に出かけようじゃありませんか。そうすりゃあ、魔法を解かれた、それはそれは美しくて豪勢なドウルシネーア姫が、どっかの草むらからひょっこり姿を現わさねえとも限らねえよ。・・・」

・・・「たしかにわしは狂人であったが、今では正気に戻っている。つまり、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャであったのが、今では、先にも言ったように善人アロンソ・キハーノになっているのです。ですから、わしの衷心からの悔悟の念に免じて、今はあなたがたがわしを、また以前と同じように評価してくれることを願うばかりです。・・・」

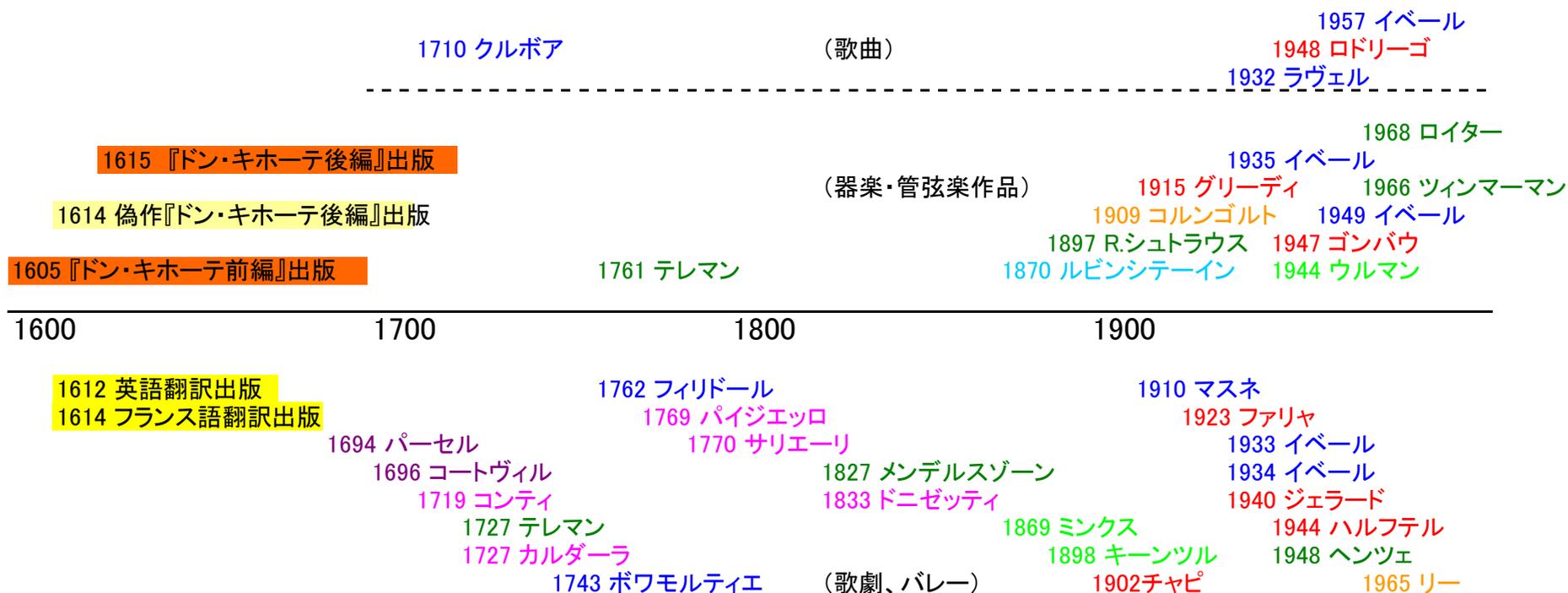
(「ドン・キホーテ後篇 (三)」 牛島信明訳より 第 74 章抜粋)

ドン・キホーテ 音楽作品 作曲年表

♪「Die Musik in Geschichte und Gegenwart」と「Lexikon Programmusik」(参760/S09-656)のセルバンテスの項目に挙げられている作品のうち本学図書館が所蔵する資料をご紹介します。

セルバンテスの作品と生涯は、17世紀以降の多くの作曲家の創作意欲を駆り立ててきた。《ドン・キホーテ》は、100曲を超える音楽作品の素材として使われている。

- スペイン
- フランス
- ドイツ
- オーストリア
- イタリア
- ロシア
- アメリカ
- イギリス



ドン・キホーテ 音楽作品一覧

♪タイトルはOPAC作品名あるいは「Die Musik in Geschichte und Gegenwart」、「Lexikon Programmusik」(参760/S09-656)の表記です。
邦訳は「ニューグローヴ世界音楽大事典」、「クラシック音楽作品名辞典」(参MA/U02-874)、あるいは資料中の表記です。

(作曲家五十音順)

作曲家	作曲年	形式	タイトル	邦訳	所蔵 リスト p.
イベール Ibert, Jacques, 1890-1962	1933	映画音楽	Don Quichotte	ドン・キホーテ	19
イベール Ibert, Jacques, 1890-1962	1934	バレエ	Le chevalier errant	遍歴の騎士	19
イベール Ibert, Jacques, 1890-1962	1935	管弦楽曲	Suite, from Le chevalier errant	組曲「遍歴の騎士」より	19
イベール Ibert, Jacques, 1890-1962	1949	管弦楽曲	Sarabande pour Dulcinee	ダルシネアのためのサラバンド	19
イベール Ibert, Jacques, 1890-1962	1957	歌曲	4 chansons de Don Quichotte et chanson de Sancho (from film music Don Quichotte)	ドン・キホーテの4つの歌とサンチョの歌 (映画音楽「ドン・キホーテ」より)	20
ウルマン Ullmann, Viktor, 1898-1944	1944	序曲	Don Quixote tanzt Fandango		20
カルダーラ Caldara, Antonio, 1670-1736	1727	歌劇	Don Chisciotte in corte della duchessa		20
キーンツル Kienzl, Wilhelm, 1857-1941	1898	歌劇	Don Quixote		20
グリーディ Guridi, Jesus, 1886-1961	1915	交響詩	Una aventura de Don Quijote	ドン・キホーテの冒険	21
クルボワ Courbois, Philippe, 1705-30	1710	カンタータ	Dom Quichotte	ドン・キホーテ	21
コートヴィル Courteville, Raphael, fl. 1687-ca. 1735	1696	付随音楽	Comical History of Don Quixote	ドン・キホーテの滑稽な遍歴	21
コルンゴルド Korngold, Erich Wolfgang, 1897-1957	1909	ピアノ独奏	Don Quixote		21
コンティ Conti, Francesco, 1681 or 2-1732	1719	歌劇	Don Chisciotte in Sierra Morena	モレーナ山中のドン・キホーテ	22

作曲者	作曲年	形式	タイトル	邦訳	所蔵 リスト p.
ゴンバウ Gombau, Gerardo, 1906-1971	1947	管弦楽曲	Don Quijote velando las armas	寝ずの番をするドン・キホーテ	22
サリエーリ Salieri, Antonio, 1750-1825	1770	歌劇	Don Chisciotte alle nozze di Gamace		22
ジェラード Gerhard, Roberto, 1896-1970	1940	バレエ	Don Quixote	ドン・キホーテ	22
シュトラウス, リヒャルト Strauss, Richard, 1864-1949	1897	交響詩	Don Quixote: fantastische Variationen uber ein Thema ritterlichen Charakters, op. 35	ドン・キホーテ:騎士的な性格の主題による 幻想的変奏曲	23
チャピ Chapi, Ruperto, 1851-1909	1902	サルスエラ	La venta de Don Quijote		25
ツインマーマン Zimmermann, Bernd Alois, 1918-1970	1966	チェロ協奏曲	Concerto en forme de "Pas de trois"	パード-トロワの形式によるチェロ協奏曲	25
テレマン Telemann, Georg Philipp, 1681- 1767	1727	歌劇	Sancio oder Die siegende Grossmuth, TWV 21: 20	サンチョ	25
テレマン Telemann, Georg Philipp, 1681- 1767	1761	序曲	Overture, strings & basso continuo, G major, "Burlesque de Quixote", TWV 55: G10	序曲 弦と通奏低音ト長調 組曲「ドン・キホーテのブルレスカ」	26
ドニゼッティ Donizetti, Gaetano, 1797-1848	1833	歌劇	Il furioso all'isola di San Domingo	サン・ドミンゴ島の怒れる男	26
パーセル Purcell, Henry, 1659-1695	1694	付随音楽	The comical history of Don Quixote	ドン・キホーテの滑稽な物語	27
パイジエツロ Paisiello, Giovanni, 1740-1816	1769	歌劇	Don Chisciotte della Mancia	ラ・マンチャのドン・キホーテ	27
ハルフテル Halffter, Ernesto, 1905-	1944	付随音楽	Schauspielmusik zu Dulcinea		27
ファリャ Falla, Manuel de, 1876-1946	1923	パペット・ オペラ	El retablo de maese Pedro	ペドロ親方の人形芝居	28
フィリドール Philidor, F. D. (Francois Danican), 1726-1795	1762	歌劇	Sancho Panca, gouverneur dans l'isle de Barataria		28
ヘンツェ Henze, Hans Werner, 1926-	1948	歌劇	Das Wundertheater	不思議な劇場	28

作曲者	作曲年	形式	タイトル	邦訳	所蔵 リスト p.
ボワモルティエ Boismortier, Joseph Bodin de, 1689-1755	1743	バレエ	Don Quichotte chez la duchesse	公爵夫人家のドン・キホーテ	29
マスネ Massenet, Jules, 1842-1912	1910	歌劇	Don Quichotte	ドン・キホーテ	29
ミンクス Minkus, Leon Fyodorovich, 1826-1917	1869	バレエ	Don Kichot	ドン・キホーテ	29
メンデルスゾーン Mendelssohn-Bartholdy, Felix, 1809-1847	1827	歌劇	Die Hochzeit des Camacho, op. 10	カマーチョ(カマチョ)の結婚	30
ラヴェル Ravel, Maurice, 1875-1937	1932	歌曲	Don Quichotte a Dulcinee	ドゥルシネアに心を寄せるドン・キホーテ	30
リー Leigh, Mitch, 1928-	1965	ミュージカル	The Man of the Mancha	ラ・マンチャの男	32
ルビンштейン Rubinstein, Anton, 1829-1894	1870	管弦楽曲	Don Quixote		33
ロイター Reutter, Hermann, 1900-	1968	ヴァイオリン独奏	Cinco caprichos sobre Cervantes		33
ロドリゴ Rodrigo, Joaquin, 1901-	1948	合唱	Ausencias de Dulcinea	ドゥルシネアの不在	33

この小説は全訳と部分訳を合わせて、これまでに60以上の外国語に翻訳されており、聖書に次いで広く行き渡っている。
(「ドン・キホーテの旅」より)

『ドン・キホーテ』は17世紀には哄笑により、18世紀には微笑により、そして19世紀には涙によって迎えられた。・・・
19世紀はセルバンテスの評価が極まった時期である。
・・・『ドン・キホーテ』は人間の天才によって創造されたあらゆる書物の中で、最も偉大な、最も憂鬱な書物である(ドストエフスキー『作家の日記』)

作曲家紹介 (五十音順)

紹介記事はニューグローヴ世界音楽大事典Webを引用しています。

★イベール Ibert, Jacques, 1890-1962

フランスの作曲家、行政官。

イベールは演劇を勉強した後に音楽に転向したが、これは意味深いことである。ドビュッシー同様、イベールにとって音楽は他の諸芸術と密接な関係にあり、音楽表現は経験のあらゆる側面に対応する想像力の総合的応答に欠くことのできないものであった。彼はフランスの作曲家のなかで最も「万能な」作曲家の一人であった。バレエ曲〈遍歴の騎士 Le chevalier errant〉は、最も重要で完成度の高い作品の一つといえよう。これは《ドン・キホーテ》に基づく舞踊叙事詩で、希望と絶望の間を揺れ動く人間の内的な葛藤をけれん味なく表現している。

★ウルマン Ullmann, Viktor, 1898-1944

オーストリア-ハンガリーの作曲家。ウィーンでシェーンベルクに師事する。これは1918～21年のことと思われる。プラハに戻った後、ボヘミアでのドイツ音楽の再建に尽力し、新ドイツ劇場で伴奏者、指揮者として、またプラハ個人音楽活動協会の会員として活躍した。ウルマンは、作品においてはシェーンベルクの理論よりもその精神に触発されており、その精神をドイツ風ボヘミア音楽の伝統的手法で表現した。

★カルダーラ Caldara, Antonio, 1670-1736

イタリアの作曲家。イタリアの声楽音楽が急速な発展を遂げた時代に、マントヴァ、ローマ、ウィーンで重要な地位に就いており、創作活動が旺盛な世代のなかでも最も多くの作品を残した作曲家の一人である。

★キーンツル Kienzl, Wilhelm, 1857-1941

オーストリアの作曲家。

1925年に彼は次のように書いている。「私は無調音楽は作れないし、今後も作らないだろう。しかし同様に、平凡な曲や古風な曲を作るつもりもない」。講演、指揮、作曲は続けたが、新しい音楽を理解することはなかった。36年以降は健康を害したために作曲活動を断念する。自分のオペラがドイツやオーストリアで公演されなくなったことに落胆したが、フンパーディンクとともに、ヴェーバーやロルツィング、ヴァーグナーの初期の作品の伝統を維持し、オペラにおけるロマンティシズムの再興に尽力した。そして民俗オペラの素朴な要素に立ち戻り、ヴァーグナーの音楽の影響を強く受けた民俗オペラを発展させることに成功した。キーンツルは、民衆的な場面や方言を使った作品で最も力を発揮した。

★グリーディ Guridi, Jesus, 1886-1961

スペインの作曲家、オルガニスト。

1915年にはバスクの風習を題材とした彼の最初のオペラ〈ミレンチュ Mirentxu〉が上演されて大成功を収め、管弦楽曲〈ドン・キホーテの冒険 Una aventura de Don Quijote〉でマドリッド芸術サークルの賞を獲得する。グリーディはオペラや管弦楽曲の作曲家として、オルガニストとして、また多くの自作中で用いているバスク民俗音楽の研究者としても際立った存在であった。

★クルボワ Courbois, Philippe, 1705-30年活躍

フランスの作曲家。

一時はメーヌ公夫人邸の楽長であった。ソーにあったこの屋敷は、ルイ14世時代の末期から摂政時代の初めにかけて、音楽活動の重要な中心となっていた。クルボワが自作のカンタータ集を出版したのは、「ソーの夜会 Les nuit de Sceaux」と呼ばれるメーヌ公夫人のための盛大な夜会が催された期間(1714~15)の直前であった。公夫人に献呈された7曲のカンタータのテキストは、後にラモーの〈優雅なインドの国々 Les Indes galantes〉の台本を手掛けたルイ・フェズリエ(1674~1752)の作である。〈ドン・キホーテ Dom Quichotte〉はこの曲集の白眉であり、カンタータのレパートリーにおいて重要な作品である。

★コートヴィル Courteville, Raphael, 1687-1735年頃活躍

イギリスのオルガニスト、作曲家。歌手ラファエル・コートヴィル(1675.12.28没)の息子。1691年9月7日に、バーリントン伯の推挙により、年俸20ポンドでピカディリーの聖ジェイムズ教会のオルガニストに任命された。彼が作曲を担当した劇には、テイトの〈公爵と偽公爵 A Duke and no Duke〉(1684)、サザンの〈オルーンノーコー Oroonoko〉(1695)、ダーフィ어의〈ドン・キホーテ Don Quixote〉第3部(1695)がある。

★コルンゴルト Korngold, Erich Wolfgang, 1897-1957

オーストリア-ハンガリー系のアメリカの作曲家。父は著名なオーストリアの音楽批評家ユーリウス・コルンゴルト(1860生, 1945没)である。

エーリヒ・コルンゴルトは少年時代より驚くべき作曲の才を発揮した。

コルンゴルトは、偉大なロマン派の最後の作曲家の一人であった。しかしながら、長年にわたって彼を軽視し容赦なく痛めつける批評に苦しんだ。これは主に、時代の風潮が変化したことと、彼のハリウッドとの関係によるものであった。その後1975年には〈死の街〉がニューヨークで超満員のうちに再演され、このオペラと交響曲嬰へ長調のレコードが発売された。彼の豊饒で後期ロマン派的な和声、天性の旋律の美しさ、音楽に関する深い感覚性は、再び支持を得つつあるように見える。

★コンティ Conti, Francesco, 1681 or 2-1732

イタリアのテオルボ奏者、作曲家。

コンティのオペラとインテルメッツの幾つかはウィーン以外、特にドレスデン、ハンブルク、ブレスラウ、ブラウンシュヴァイクで上演された。喜劇が入っているものが特に人気があり、カイザー、テレマン、マッテゾンらは原作を翻訳、改訂、または剽窃した。〈モレーナ山中のドン・キホーテ Don Chisciotte in Sierra Morena〉はとりわけ人気があった。彼の音楽は世俗音楽であれ宗教音楽であれすべて、劇的なものに対する鋭い眼識を示している。

★ゴンバウ Gombau, Gerardo, 1906-1971

スペインの作曲家、教師。(Die Musik in Geschichte und Gegenwart より)

★サリエリ Salieri, Antonio, 1750-1825

イタリアの作曲家。主にウィーンで活躍した。音楽史上の幾つかの世代をつなぐ役割を果たしたとする見方もある。すなわち、フックス、ガスマン、グルックらのウィーンの伝統を継承し、モーツァルトの生涯を目の当たりにし、また一方で1784年から88年にかけてパリのオペラ界に君臨し、18世紀末から19世紀初頭の多くの芸術家や学者とも親交があった。また、1770年から1810年までに生まれた多くの音楽家が彼の指導を受けた。1775年頃から、彼の影響力はウィーンの音楽生活のあらゆる面に見られた。

★ジェラード Gerhard, Roberto, 1896-1970

フランス・スイス系のスペインの作曲家。後にイギリスに帰化した。

1950年代末まで、最後の3つのバレエ曲とスペインの軽音楽および歌曲の編曲を除いて、作品のほとんどは出版も演奏もされず、彼を称賛する人々のほかには知られていなかった。しかし、47年のISCM音楽祭でバレエ〈ドン・キホーテ Don Quixote〉からの第2管弦楽組曲が演奏され、オペラ〈ドゥエンナ The Duenna〉は49年のBBCによる放送に続いて、51年にはヴィースバーデンでのISCM音楽祭でコンサート形式で演奏された。バレエ曲〈ドン・キホーテ〉において、ジェラードは極めて個性的でありながら明らかに民族的な舞曲様式の完成の極みに達した。

★シュトラウス, リヒャルト Strauss, Richard, 1864–1949

ドイツの作曲家、指揮者。

シュトラウスは、自身で楽譜に書き記しているように、交響詩「ドン・キホーテ」を「大管弦楽のための、騎士的な性格の一つの主題による幻想的変奏曲」で書き上げた。この一つの主題というのは、「悲しげな姿の騎士、ドン・キホーテ」であるが、曲は、実際はこの他に、従者のサンチョ・パンザの旋律も主要な変奏の主題とし、さらに、貴婦人の旋律を副次的な主題としている。そして、幻想的変奏曲と記されているとおり、自由な構成と変奏法による十の変奏と終曲を続けていて、ドン・キホーテの奇行を次々と音楽で描いてゆく。

曲は、ドン・キホーテの小説の二面性、つまり、現実と空想の世界、意思と可能性をたくみに対立させ、ドン・キホーテのかずかずの奇行をシュトラウスの優れた管弦楽法で色彩的にユーモラスに描き出す。対位法の用法も手がこんでいて、なによりも細部に神経のゆきとどいた一幅の絵巻物のようであった。（「最新名曲解説全集」より）

★チャピ Chapi, Ruperto, 1851–1909

スペインの作曲家。

チャピは政府から研究奨学金を給付され、最初はローマのスペイン芸術アカデミーで、次いでミラノとパリで学んだ。再びマドリードに戻ったチャピは、1幕物の〈古典音楽 Música clásica〉(1880)をはじめとして100曲以上のサルスエラを作曲しているが、その多くは実に100晩以上も連続して上演された。下層階級の人々に愛されたチュエーカとは対照的に、チャピのサルスエラはマドリードの中流、上流階級の聴衆に愛好された。1905年には4つの弦楽四重奏曲のうちの第1番を出版したが、これはサルスエラ作曲家としては珍しい試みであり、チャピの音楽上の目標の高さを示している。

★ツインマーマン Zimmermann, Bernd Alois, 1918–1970

ドイツの作曲家。1950年代、60年代に流行したさまざまな楽派とは一線を画し、独自の様式を着実に発展、完成させた。引用に重要な意味を持たせ、豊かに彩られた無調性を慎重に織り上げていく作風である。唯一のオペラ〈兵士たち Die Soldaten〉は、ドイツではベルク以来最も重要な作品として広く知られている。

★テレマン Telemann, Georg Philipp, 1681–1767

ドイツの作曲家。

テレマンの現存する126曲前後の管弦楽組曲のうち、34曲が、標題付きの楽章を含んでいる。ギャラント様式の時代に、啓蒙主義思潮の浸透と共に好まれた、音による絵画的描写の恒例である。「ドン・キホーテ」は、そうした標題付き組曲のうちでも、「ハンブルクの潮の満干」などと並んで親しまれているもの。ここでテレマンは、セルバンテスの小説でお馴染みの主人公たちの活躍ぶりを、民話風のタッチで明るく描いている。標題的要素は組曲としての構成の中で控え目に、サラリと扱われているに過ぎないが、音楽は単純ながら平明な魅力に富み、テレマンの庶民的なセンスをよくうかがわせる。（「最新名曲解説全集」より）

★ドニゼッティ Donizetti, Gaetano, 1797–1848

イタリアの作曲家。1835年のベッリーニの死から、42年に〈ナブッコ Nabucco〉によってヴェルディが台頭するまで、イタリアのオペラ界に君臨した。

33年にはローマで2つのオペラ、〈サン・ドミンゴ島の怒れる男 Il furioso all'isola di San Domingo〉と〈トルクアート・タッソ Torquato Tasso〉が上演された。このときドニゼッティは、23歳のバリトン歌手ジョルジョ・ロンコーニから刺激を受けた。この歌手の異様な劇的迫力を知り、それまでイタリアのオペラ・セリアでめったに開拓されることのなかったこの種の声の可能性に開眼する。

★パーセル Purcell, Henry, 1659–1695

作曲家、オルガニスト、バス歌手、カウンターテナー歌手。バロック期屈指の作曲家であり、またイギリスの音楽史上最も傑出した作曲家の一人に挙げられる。

カンタータ様式は、当時人気があった「狂乱の歌」に、特にふさわしいものである。というのは、その歌では落胆から狂的な空想までのさまざまな段階の狂気が、音楽の対照性によって描写されうからである。典型的な例は〈ドン・キホーテの滑稽な物語 The Comical History of Don Quixote〉第3部の「薔薇のあずまやから From rosy bowers」である。これはパーセルが書いた最後の歌曲として没後に出版された。

★パイジエツロ Paisiello, Giovanni, 1740–1816

イタリアの作曲家。18世紀後半に最も成功を収め、最大の影響力を持ったオペラ作曲家の一人。

パイジエツロの名声は、一貫してオペラによっており、オペラの作品数は80を超す。創作活動に入った初めの頃は、喜歌劇の作曲依頼が最も多かった。持ちまえの生气あふれる優雅な音楽は、特に喜歌劇に適していた。パイジエツロは仕事を始めた当初から、進歩的な作曲家であった。

★ハルフテル Halffter, Ernesto, 1905–

スペインの作曲家、指揮者。ハルフテルのファリャの作品への深いかかわりは、多くの場合、創造的な反応をもたらした。だが、それは単なるきっかけで、ひとたび自らの道を見出した後は、ファリャとは非常に異なった結果を生み、それはむしろプーランクに近いものであった。ハルフテルは変わることなく調性への信念を持ち続けていたが、1960年代に聞いたポスト・ヴェーベルン派の音楽に刺激を受け、これら後期の作品のスタイルを徹底的に洗い直した。後期の作品は同時に、スペイン・ルネサンスの模倣など、過去のスタイルへの回帰を示している。

★ファリャ Falla, Manuel de, 1876–1946

スペインの作曲家。

グラナダでは、ファリャは教養ある友人たちに囲まれていた。中でも最も著名な人物はロルカであった。彼らは共にスペインの小規模劇場の伝統を愛好しており、《ドン・キホーテ Don Quixote》の一部を選んで曲をつけるに当たって、ファリャが「ペドロ親方の人形芝居 El retablo de maese Pedro」の章を選んで人形劇として作曲したのも驚くにあたらない。この作品はエドモン・ド・ポリニャック公夫人に委嘱されたもので、1923年にパリの夫人の家で初演された。語り手の少年のトルハマン、ドン・キホーテ、ペドロ親方という3人の歌う登場人物は、異なる音楽様式によって表現されている。ペドロ親方には通俗的な音楽様式、ドン・キホーテには叙情的なネオ・ルネサンス様式、トルハマンには宗教歌、民衆的な物売りのふれ声、古風なロマンスなどを混ぜ合わせた様式を使用した。

★フィリドール Philidor, F. D. (Francois Danican), 1726–1795

作曲家。アンドレ・ダニカン・フィリドールの末子。当時はチェスの名手として有名であったが、舞台作品は、彼が当時のフランスで屈指の才能ある作曲家であったことを示している。フィリドールはフランス様式とイタリア様式の両方を学び、当時のドイツ音楽にも明らかに精通しており、初期のオペラ・コミック作曲家のなかで最高水準の技量を持っていたと通例考えられている。

★ヘンツェ Henze, Hans Werner, 1926–

ドイツの作曲家。スケールの大きな数々の作品集で、若い頃から名声を確立した。同世代の最も才能あふれる作曲家の一人として成功を収め、世界的にその名を知られている。20世紀の音楽家のなかでは、その豊かな創造力は傑出しており、また標準的なジャンル、すなわちオペラ、交響曲、協奏曲に見られる思慮深い開拓も、第2次世界大戦後の前衛(アヴァン・ギャルド)に、厳密ではないにしても長くかかわってきた作曲家としては、並外れたものである。

★ボワモルティエ Boismortier, Joseph Bodin de, 1689–1755

フランスの作曲家。彼は幼年時代をティオンヴィルで過ごし、1700年頃にメスに移った。22年以後パリへ行き、最初の作品を24年に出版した。それ以来47年までの間に、声と楽器編成の面で変化に富み、多岐のジャンルにわたる102の作品を、番号をつけて出版している。

★マスネ Massenet, Jules, 1842–1912

フランスの作曲家。同世代のフランス・オペラ作曲家のなかで傑出しており、最も多作であった。（「ニューグローヴ世界音楽大事典」より）「ドン・キホーテ」は、マスネの晩年近くの傑作オペラで、有名なロシア出身のバス歌手シャリアピンがタイトル・ロールを歌うために書かれた作品。もとになったのはローランのお芝居（1904年）で、モンテ・カルロ歌劇場の支配人がオペラ化をマスネに提案して書かれた。「ドン・キホーテ」自体かなり長大な小説だが、その中からドゥルシネ（ドゥルシネア）に関するエピソードを中心にまとめた、一種の悲恋ものになっている。現在でもバス歌手の重要なレパートリーのひとつといわれる。（「一冊でわかるオペラガイド126選」より）

★ミンクス Minkus, Leon Fyodorovich, 1826–1917

チェコあるいはポーランド系の作曲家、ヴァイオリニスト。ロシアで活動したが、音楽はウィーンで学んだものと思われる。ミンクスはロシアでは作曲家として幸先よいデビューを飾った。1869年に上演されたプティパ台本、ゴールスキイ振り付けによるミンクスのバレエ（ドン・キホーテ Don Quixote）はモスクワで好評を博したのである。この作品はその後も長い間レパートリーに残り、旧ソ連のバレエ団によっても時折再演された。

★メンデルスゾーン Mendelssohn-Bartholdy, Felix, 1809–1847

ドイツの作曲家。
メンデルスゾーンの唯一完成されたオペラである初期の作品〈カマーチョの結婚〉の題材は、《ドン・キホーテ》の社会批判的な風刺に基づいている。キューピッドの戦士が富の擁護者を打ち負かす第2幕のなかには、結婚を祝う幕間のバレエがあるが、これは社会批判をそれとなくほめかしてオペラの構想を強調しており、1827年4月29日の初演に反対するデモが行われた原因の一つがそこにある可能性は高い。

★ラヴェル Ravel, Maurice, 1875–1937

フランスの作曲家。その特徴ある様式によって変わらぬ人気を博し、またそのきちょうめんな職人かたぎによって、同時代の作曲家のなかで卓越した地位を保ってきた。（「ニューグローヴ世界音楽大事典」より）
「ドゥルシネア姫に心を寄せるドン・キホーテ」は、ラヴェルの最後の作品である。ある映画のプロダクションが、シャリアピン主演の映画「ドン・キホーテ」を企画し、それに大作曲家の音楽をつけようとした。そして、ラヴェルと他にもミヨー、イベール、ファリャにそれを委嘱したのである。だが、実際に用いられたのはイベールのもの。当然これは訴訟問題にもなったのであるが、そのあげく作品として結晶したのがこの三つの歌曲なのである。（「最新名曲解説全集」より）

★リー Leigh, Mitch, 1928-

アメリカのソングライター。イエール大学で作曲をヒンデミットに師事する。1954年にテレビ・コマーシャル用の作品を書き始め、57年には自作の演奏のためにミュージック・メイカーズを結成する。ショーの〈Too True to be Good〉の再演や(1963)、ブロードウェイ劇〈プレッツェル工場じゃ生きていけない Never Live over a Pretzel Factory〉(1964)の付随音楽を作曲し、ミュージカル〈ラ・マンチャの男 Man of La Mancha〉(1965)で初めて国際的な成功を収めた。このミュージカルの詩を書いたJ.ダリオンとは、〈私たちみんなのために泣け Cry for All of Us〉(1970)でも再び手を組んでいる。

★ルビンシテーイン Rubinstein, Anton, 1829-1894

ロシアのピアニスト、作曲家、教師。ニコライ・ルビンシテーインの兄。19世紀の最も偉大なピアニストの一人であり、その演奏はリストと比較しても優劣をつけがたいものであった。また、物議を醸す人物ではあったが、ロシア音楽界に大きな影響を及ぼした。並外れて多作な作曲家でもあった。
ルビンシテーインの尽力により、ロシアにおける演奏の水準と音楽家の社会的地位は大幅に改善された。すべての主要都市に国立音楽院と国立歌劇場を設け、また学校教育に音楽を加えようとする彼の遠大な理想は、ソヴィエト連邦において教えられ広められた音楽の基礎となった。

★ロイター Reutter, Hermann, 1900-

ドイツの作曲家、ピアニスト。教育、伴奏、作曲がロイターの主たる活動となる。彼は、アルマ・ムーディー、マルタ・フックス、ローレ・フィッシャー、ハインリヒ・ヴォルフ、カール・エルプ、ルードルフ・ネル、そして1945年以降は、エリーザベト・シュヴァルツコプフ、ハンス・ホッター、ディートリヒ・フィッシャー-ディースカウなどのピアノ伴奏を行った。ロイターは当時の最も多作なドイツの作曲家の一人であり、最も伝統主義的である。最初はヒンデミット派の影響を受けていたが、1930年頃、いかなる試みも回避する明確な後期ロマン主義の様式に立ち戻った。

★ロドリーゴ Rodrigo, Joaquin, 1901-

スペインの作曲家。ロドリーゴの作風はフランス音楽、特にデュカと、スペイン国民楽派の作曲家たちの作品の影響を受けたもので、時代により変化することはなかった。しかし、ファリャとは異なり、ロドリーゴはスペインの大衆音楽や芸術音楽の精神に深く入り込もうと試みることはなかった。彼が目指したのはむしろスペインの雰囲気を出す色彩鮮やかな心地よい曲であった。そこでは民族芸能は絵画的要素となり、18世紀マニエリスムの粋を集めた過去の芸術音楽への懸け橋となっている。